

薬学用語集

日本薬学会

丸善株式会社

79
RBYa
J01574

薬学用語集

JAPANESE PHARMACEUTICAL TERMS

日本薬学会

PHARMACEUTICAL SOCIETY OF JAPAN

丸善株式会社

MARUZEN CO., LTD.

1985

薬学用語集

定価 3,400円

昭和 60 年 1 月 30 日 発行

著作権 所有 社団法人 日本薬学会

発行者 海老原熊雄

発行所 丸善株式会社

郵便番号 103 東京都中央区日本橋二丁目 3 番 10 号

組版・印刷 株式会社 廣済堂・製本 株式会社 星共社

ISBN 4-621-02961-4 C3547

序

わが国における学術用語の整理統一が唱えられだしたのは、古く明治・大正の頃からだと聞く。

この動きが、実際に国家レベルで次々と実現されるようになったのは、昭和も戦後に入って22年2月、当時の学術研究会議に学術文献調査研究特別委員会学術用語調査研究科会が設けられた頃から後のことである。

薬学と密接な関係にある領域の1つ、化学領域では、いち速く上記の流れに乗って作業が行われ、30年3月、学術用語集—化学編が刊行された。同書の増訂版では、35年から（薬学会からも委員を送って）作業が始められ、47年に刊行された。

これの委員会に委員を送ったことに対応する意味も兼ねて、薬学用語の統一と制定をはかるため36年、薬学会にも薬学用語委員会が設けられ、広く且つ多岐にわたる薬学領域で用語を定める努力が続けられた。46年、この成果は学術用語集—薬学編とはならなかったものの、薬学用語辞典として刊行された。

用語集がつくられるまでには、以上の諸例に見られるように、1つには長い時間の辛抱強い努力を必要としたことは勿論であるが、また1つには何等かの気運の様なものが必要であったようである。

今回はこの“気運”は、長い間のファルマシアやファルマシアレビューづくりの間に、薬学用語としてオーソライズされたものの必要性が浮き彫りにされて来たことと、国際化により次々と入って来る外来語の、用語化される際の不統一さ加減がそろそろ限界となってきたこと等にあったと思われる。もう1つの、“長い時間”については、委員会発足以来3年余りであるから、どちらかと言えば短かったのかも知れないが、それだけ委員

ならびにチェッカー、編集部各位は密度の高い作業をされたものであろう。

この薬学用語集は、まず、文部省の学術用語集—薬学編、的なものを目差して作られている。が、更にそれに止まらず薬学の特殊性が考慮されて薬事行政用語が沢山盛られている（このため文部省の学術用語集とする方向は採られなかった）ので、薬学の、学術分野だけでなく、薬業・薬事行政等々の分野にわたって広く“薬学”用語の拠り所として、他領域の学術用語集同様に利用されることを切望する。

もとより本用語集は未だ完璧とは云えないかも知れない。然しながら現状における1つの基準を示したものであることは間違いなく、今後はこれを基に足らざるを補い誤りをただす不断の努力を続けて、より完全な薬学用語集をめざすことが大切、と思われる。この面では、関係各位を初め、多くの利用者の御尽力を仰ぎたい。

終りに、本用語集のために多大の労をとられた編集委員、チェッカー、支部長、理事並びにそれら各位から依頼を受けて御協力下さった多数の方方に衷心からの感謝を捧げる。

昭和59年12月

日本薬学会会頭

亀 谷 哲 治

まえがき

現在薬学独自の用語として、公的に規定されているものには薬局方の用語がある。文部省は諸学問領域の学術用語をそれぞれの学会の検討結果に基いて次々に制定しており、それらは出版物として広く公表されている。しかし、薬学領域にはまだそのようなものはない。日本薬学会としては、昭和36年に薬学用語委員会を結成して薬学用語の統一と制定をはかるための検討を行ったが、公的な学術用語集を刊行するには至らなかった。結果的には、諸般の事情を考慮して昭和46年に10年がかりで「薬学用語辞典」を刊行したが、これは本来の薬学用語集とは言えず、理化学辞典と重複する性格のものであった。薬学用語を制定する場合の難しさは、まず薬学の学問的多様性のために他学問領域から導入された用語が多く、しかもそれらが薬学独特の用語よりも頻繁に使われる場合もあり、またいわゆる学術的な用語の他に社会との関連において用いられる用語が多いところにある。

しかし、文部省の指導とはかかわりなく、日本薬学会は、課された社会的責任の一つとして薬学用語の制定を是非とも実現させなければならぬと言える。加えて、近年薬学が包含している諸分野の進歩発展は著しく、次々に生れてくる新しい用語について薬学関係者の共通の理解が得られることが大事になってきた。このようなことから、古くから用いられている用語ならびに新しい用語を合理的に整理・検討して収載した薬学用語集の出版が多くの薬学関係者から強く要望されている。これに応え、日本薬学会事業企画委員会（野口照久委員長）は同理事会の議を経て、昭和56年3月、当薬学用語集刊行実行委員会（永井恒司委員長）を発足させた。

上記「薬学用語辞典」の編集経験から教えられたことは、言葉は“生きもの”であるため、編集から印刷まで10年もかかると、でき上がったときにはすでに古語と化すものが含まれることにもなる。学術用語集がその機能を果たすためには、できるだけ短期間に刊行を終了し、そしてあたかも薬局方が5年ごとに改正されるごとく、できるだけ頻繁に増訂されることが望ましい。そのような見地から、当委員会としては将来逐次改定が行われるであろうことを前提として薬学用語集の編集を行ってきた。また、編集上最も苦労したのは、単に同義語を集めて羅列するのではなく、最も適当と思われるものを選定するための作業である。

この用語集は、公的な学術用語集としての条件にかなうべく、薬学独自の用語を重点的に収載し、これらが薬学・薬業・薬事行政に関する論文・公文書などで標準的かつ公的なものとして使用されることを目指している。したがって、ここに収載される用語は広く日本薬学会会員のコンセンサスを得て定められなければならない。このための方策として当委員会は次のような手順によって作業を行った。

- (1) 国内外の標準的な教科書の和文・欧文の索引を参考にして各委員が分野別に原案をつくり、それを委員会で検討した。
- (2) 原案についてチェッカーによるチェックを受けた。

a) チェッカー（諮問委員）はその分野の委員会がある場合（薬剤学委員会・衛生化学調査委員会・薬毒物化学調査委員会・調剤技術委員会等）は各委員会に、またそのような委員会のない場合は当該教科担当教官（教員）会議等にチェッカーの推薦を依頼した。

b) チェッカーにチェックを依頼した。その場合次のように評点をお付け願った。

薬学独特の用語と思われるもの……………4点
薬学独特ではないが、他分野とは意味や使い方が異なると

思われるもの…………… 3 点

薬学独特ではないが、他分野と同意味で薬学で頻繁に使わ

れると思われるもの…………… 2 点

薬学独特ではなく、他分野と同意味で薬学でもたまに使われ

れると思われるもの…………… 1 点

- c) 委員会でチェッカーからの評点を1語ごとに集計して平均値を算出し、それを各語に付してチェッカーに戻し、その点数を参考にしてもう一度見直して評点をお付け願った(デルファイ方式を模して)。ここで、チェッカーは当初の考えを修正してよいことにした。
- (3) 上記(2)－c)の結果をもとに、高点数のものから順に約5,000語位を目標に委員会で選定を行い、カード化した。ここで選定は文部省の学術用語審査基準に従って行った。ただし、薬学の特殊性を考慮し、本来的な学術用語のみに限定せず、薬学領域で固有に、公用上汎用されている用語も学術用語に準じて収録した。また、法的に死語となった用語でも一般に繁用されているものは収録した。
- (4) 全分野からの結果を、和英の部についてコンピューター処理により合併し粗案とした。

これについて委員会において各分野間での使い方の統一・調整をはかった。また、「薬」と「剤」の区別、「形」と「型」の区別、欧語の日本語カナ文字への読みかえりなどの常法など、従来薬学領域で慣用されてきたことは踏襲した。その他は、学術用語集の一般的作成法にのっとった。

- (5) (4)で処理した結果の項目を和英の部はローマ字読みについて、英和の部は和英の部の逆引きという形としてその英字について各アルファベットに配列し、これを日本薬学会第104年会文献情報管理部会に薬学用語集(案)として公表し、またこれについて日本薬学会各支部長を介して広く関心を寄せる会員に伝達願い、適当な期限をもうけて意見をお寄せ願った。また日本薬学会理事にも送付して意見を寄

せてもらった。更に「ファルマシア」で全会員に支部長を介して第一次案に対する意見を寄せてくれるよう呼びかけた。各委員も再チェックを行った。

- (6) 上記(5)によって寄せられた意見を一括して1語ずつ委員会でチェックして採否を決定し、整理し直した。
- (7) これをチェッカーに送って最終的なチェック願った。
- (8) その結果について1語ずつ委員会でチェックして最終原稿とした。

終りに、本用語集刊行にあたり、支部長や理事、委員、チェッカーなどを介して、貴重な意見をお寄せいただいた会員の方々（御氏名略）に対し、厚く御礼申し上げるとともに、何回かの改訂を経て、理想に近い用語集としていくために、今後とも広く御意見・御要望をお寄せ下さるよう会員諸氏にお願い申し上げます。

昭和59年12月

日本薬学会事業企画委員会
薬学用語集 刊行実行委員会委員長

永 井 恒 司

薬学用語集チェッカーおよび編集委員会

チェッカー

衛生化学・裁判化学・公衆衛生学・微生物学・香粧品学 各分野

河村太郎, 篠田純男, 竹下隆三, 中澤泰男, 濱田昭

薬理学(関連する医学)・臨床薬理学・代謝学・毒性学 各分野

伊藤隆太, 岩田平太郎, 瀬川富郎, 渡辺和夫, 渡辺稔

薬事法規・薬事団体・組織体 各関係分野

海老原格, 遠藤武男, 梶原 彊, 平井俊樹

調剤学・調剤業務・薬品処理・処方箋 各関係分野

伊藤誠二, 原田保正, 宮家 淳

薬剤学・調剤学・薬剤製造学・製剤工学・臨床薬学(臨床薬剤学)
各分野

幸保文治, 斉藤太郎, 瀬崎 仁, 仲井由宣, 中島栄一

生薬学・天然物化学・薬化学・物理化学 各分野

桐野 豊, 下村裕子, 津田喜典, 山川浩司

分析化学・分析機器(試験法も) 各分野

大倉洋甫, 南原利夫, 穂積啓一郎

薬局方 関係分野

呉地伝夫, 滝口昭司, 渡辺光夫

(分野排列は順不同)

編集委員会

編集委員長 永 井 恒 司

斉 藤 保 須 賀 哲 弥 三 澤 美 和

山 内 盛 山 崎 恒 義 芳 川 真 丈

力 久 忠 昭

編 集 部

日本薬学会 芳川真丈・田中倫子・佐藤美江子

丸善株式会社 青木正治・斉藤康彦

例 言

1. 第1部（和英の部）においては、第1列に用語の読み方を示すローマ字書き、第2列に用語、第3列に用語に対応する外国語（主として米語）を記した。

2. 第2部（英和の部）においては、第1列に用語に対応する外国語、第2列に用語、第3列に用語の読み方を示すローマ字書きを記した。

3. 用語の表記方式は原則的に文部省学術用語集化学編に準じた。すなわち

(1) 括弧、その他の記号

(ア) [] 内は省略してよいもの。

(イ) ; は、同義語の排列。

(ウ) () 内は、同意語。

(エ) →印は、参照すべきもの。

(オ) 【 】 内は、その語の使用分野ないしは注記。但し、第十改正日本薬局方収載品名及び日本薬局方関連（試験の試薬等）のものには【局】を付した。

(カ) 生薬等の名称で、カナ書きのものに漢字をカッコ付きで併記してあるもののうち、読みが同じものは漢字を（＝）で囲み、カッコの中の語を見出し語とする意味のカッコとは区別した。

(キ) ラテン語の前には〔L〕を付してラテン語であることを示した。

(2) 日本語

(ア) 漢字・仮名遣い・送り仮名その他の表記に関しては、内閣告示又はしかるべき基準に従った。ただしその分野で広く使われているものは配慮した。

- (イ) 化合物の和名は、「日本語による化合物命名の原則」によった。
 - (ウ) 植物名、動物名についてはカナ書きとした。
 - (エ) 「-薬」と「-剤」と「-物質」の一般的区別は、「-薬」は薬効に着目して分類されたもの、「-剤」は医薬品として人体に適用できる形となっているもの、「-物質」は、生物活性のあるもので物質として分類されるものに各用いた。
 - (オ) 「かた」については、鋳型のように実体のあるもの(mold)には「型」を、それ以外のもの(type, form)には「形」を使用した。但し、一般国語辞典、命名法規則などで用語として確立されているものについてはそれによることとした。
 - (カ) がんの表記のしかたは、病名についたがんは「癌」、その他は「がん」とした。
- (3) ローマ字
- (ア) ローマ字は、内閣告示の「ローマ字のつづり方」によった。
 - (イ) 音引きは、原則として長音とした。
 - (ウ) ローマ字による学術用語の書き表し方については、文部省の「ローマ字による学術用語の書き表し方」によった。
 - (エ) 固有名詞や固有名詞由来の形容詞などは、第1字目を大文字で記した。
 - (オ) 英語の略語を日本語の用語として選定した場合の対応するローマ字としては、略語をイタリック体で記してこれに代え、排列は、A BC順とした。
- (4) 英語
- (ア) 英語と米語でつづりの異なる語は米語つづりをとった。
 - (イ) 大文字の使用は、固有名詞等英語での使い方にならった。
 - (ウ) 生薬名および漢方処方名等で用語として選定したもののうち、対応する適当な外国語がないものについては、用語のローマ字つづりを掲げ＊を付けた。

- (エ) drug と agent の区別については, drug は使用目的がある程度, 限定されているもの, agent は対象とするところが広いものに, 各つけた。
- (オ) 製剤名の単数, 複数の扱いについては, 従来 of 習慣により複数とした。
- (カ) 人名を冠した呼称につける「s」は, 他の分野で学術用語として確立されているものの他は, つけないこととした。
- (キ) 排列にあたって, 従来 of 学術用語集 of 事例にないような記号入りの用語 of 排列については, 本会薬学情報小委員会が論文誌 of キーワード of 排列に用いている方式にしたがった。

A

Abbe-kussetukei	アッペ屈折計	Abbe refractometer
Abogadoro-sû	アボガドロ数	Avogadro's number
ABO-siki-ketuekigata -bussitu	ABO式血液型物質	ABO-blood group substance
ACTH	ACTH→hukuzin- hisitu-sigeki- horumon	
adenirêto-sikurâze (adeniru-sikurâze)	アデニレートシクラ ーゼ (アデニルシク ラーゼ)	adenylate cyclase (adenylcyclase)
adeniru-sikurâze	アデニルシクラーゼ→ adenirêto-sikuraze	
ADH	ADH→kô-rinyô- horumon	
ADME	ADME (=吸収・分布・ 代謝・排泄)	ADME (=absorption・ distribution・ metabolism・excretion)
adorenarin	アドレナリン→ epinehurin	
adorenarin-sadôsei- kôka-syadan'yaku	アドレナリン作動性効 果遮断薬	adrenergic blocking agent; adrenergic blocking drug (anti-adrenaline drug)
adorenarin-sadôsei- nyûron-syadan'yaku	アドレナリン作動性ニ ューロン遮断薬	adrenergic neuron blocking drug; adrenergic neuron blocker
adorenarin-sadôsei- yakubutu	アドレナリン作動性薬 物	adrenergic drug; adrenergic agent
α -[adorenarin- sadôsei]-zyuyôtai	α -[アドレナリン作動 性]受容体	α -[adrenergic] receptor ; α - adrenoceptor
β -[adorenarin- sadôsei]-zyuyôtai	β -[アドレナリン作動 性]受容体	β -[adrenergic] receptor ; β - adrenoceptor
aenka-denpun (sanka- aen-denpun)	亜鉛華デンペン【局】 (酸化亜鉛デンペン)	zinc oxide starch powder : (L) <i>pulvis zinci oxydi amylatus</i>

aenka-ikutamôru-nankô (sanka-aen-ikutamôru-nankô)	亜鉛華・イクタモール軟膏【局】(酸化亜鉛イクタモール軟膏)	zinc oxide and ichthammol ointment : (L) <i>unguentum zinci oxydi et ichthammoli</i>
aenka-nankô (sanka-aen-nankô)	亜鉛華軟膏【局】(酸化亜鉛軟膏)	zinc oxide ointment : (L) <i>unguentum zinci oxydi</i>
afinitii-kuromatogurafii	アフィニティークロマトグラフィー	affinity chromatography
agesage-hô (appu-ando-daun-hô)	上げ下げ法(アップ-アンド-ダウン法)	up and down method
agi	アギ(=阿魏)	asafoetida : (L) <i>asa foetida</i>
agurikon	アグリコン	aglycone
ahen	アヘン(=阿片)	opium : (L) <i>opium</i>
ahen-arukaroido-atoropin-tyûsyaeki (opiato-tyûsyaeki)	アヘンアルカロイド・アトロピン注射液【局】(オピアト注射液)	opium alkaloids and atropine injection : (L) <i>injectio alkaloidorum opii et atropini</i>
ahen-arukaroido-sukoporamin-tyûsyaeki (opisuko-tyûsyaeki)	アヘンアルカロイド・スコポラミン注射液【局】(オピスコ注射液)	opium alkaloids and scopolamine injection : (L) <i>injectio alkaloidorum opii et scopolamini</i>
Ahenhō	アヘン法	Opium Law
ahen-matu	アヘン末【局】(=阿片末)	powdered opium : (L) <i>opium pulveratum</i>
ahen-san	アヘン散【局】	diluted opium powder : (L) <i>pulvis opii dilutus</i>
ahen-seizai	アヘン製剤	opiates
ahen-tinki	アヘンチンキ【局】	opium tincture : (L) <i>tinctura opii</i>
ahen-tokon-san (dôhuru-san)	アヘン・トコン散【局】(ドーフル散)	opium ipecac powder; Dover powder : (L) <i>pulvis opii et ipecacuanhae</i>
ahisan	亜ヒ酸→sansanka-hiso	
ahisan-pasuta	亜ヒ酸パスタ【局】	arsenical paste : (L) <i>pasta arsenicalis</i>
ahuratokisin	アフラトキシン	aflatoxin

akonitto-kon	アコニット根	aconite root : [L] <i>aconiti tuber</i>
akurinôru (nyûsan-etakurizin)	アクリノール【局】(乳酸エタクリジン)	acrinol : [L] <i>acrinolum</i>
akurinôru-aenka-nankô (akurinôru-sankaaen-nankô)	アクリノール・亜鉛華軟膏【局】(アクリノール酸化亜鉛軟膏)	acrinol and zinc oxide ointment : [L] <i>unguentum acrinoli et zinci oxidi</i>
akurinôru-sankaaen-nankô	アクリノール酸化亜鉛軟膏→akurinôru-aenka-nankô	
akurinôru-tinku-yu	アクリノール・チンク油【局】	acrinol and zinc oxide oil : [L] <i>oleum acrinoli et zinci oxidi</i>
akuriru-zyusi	アクリル樹脂	acrylic resin
akusei-hinketu	悪性貧血	pernicious anemia
akusei-syuyô	悪性腫瘍	malignant tumor
akusyaruharoketon-soku	アクシャルハロケトン則	axial haloketone rule
akyô	アキョウ (=阿膠)	akyô* : [L] <i>corii asini colla</i>
akyûsei-dokusei	亜急性毒性	subacute toxicity
akyûsei-sekizui-sisinkeisyô (sumon)	亜急性脊髄視神経症 (スモン)	subacute-myelo-optico-neuropathy (SMON)
amai	甘い【局】	sweet
amanin	アマニン (=亜麻仁)	flaxseed; linseed : [L] <i>lini semen</i>
amansei-dokusei	亜慢性毒性	subchronic toxicity
amatya	アマチャ【局】(=甘茶)	sweet hydrangea leaf : [L] <i>hydrangeae dulcis folium</i>
amatya-matu	アマチャ末【局】(=甘茶末)	powdered sweet hydrangea leaf : [L] <i>hydrangeae dulcis folium pulveratum</i>
amidotorizo-san	アミドトリゾ酸【局】	amidotrizoic acid : [L] <i>acidum amidotrizoicum</i>

amidotorizo-san- megurumin- tyûsyaeki	アミドトリゾ酸メグル ミン注射液【局】	meglumine amidotrizoate injection : (L) <i>injectio meglumini acidi amidotrizoatis</i>
amidotorizo-san- natoriumu- megurumin- tyûsyaeki	アミドトリゾ酸ナトリ ウムメグルミン注射 液【局】	meglumine sodium amidotrizoate injection : (L) <i>injectio meglumini natrii amidotrizoatis</i>
amigudarin	アミグダリン	amygdalin
amino-ansokukôsan- etiru (anesutamin, benzokain)	アミノ安息香酸エチル 【局】(アネスタミ ン、ベンゾカイン)	ethyl aminobenzoate : (L) <i>ethylis aminobenzoas</i>
4-aminoantipirin-hô	4-アミノアンチピリン 法	4-aminoantipyrine method
amino-benziru- penisirin	アミノベンジルペニシ リン→anpisirin	
amino-benziru- penisirin-natoriumu	アミノベンジルペニシ リンナトリウム→ anpisirin- natoriumu	
aminofenazon	アミノフェナゾン→ aminopirin	
aminofirin	アミノフィリン【局】	aminophylline : (L) <i>aminophyllinum</i>
aminofirin-tyûsyaeki	アミノフィリン注射液 【局】	aminophylline injection : (L) <i>injectio aminophyllini</i>
amino-haitôtai- kôseibussitu	アミノ配糖体抗生物質	aminoglycoside antibiotics
aminopirin (aminofenazon)	アミノピリン【局】(ア ミノフェナゾン)	aminopyrine : (L) <i>aminopyrinum</i>
γ -amino-rakusan (GABA)	γ -アミノ酪酸 (GABA)	γ -aminobutyric acid (GABA)
amino-sakusan (gurisin)	アミノ酢酸【局】(グリ シン)	aminoacetic acid : (L) <i>acidum aminoaceticum</i>
amino-san	アミノ酸	amino acid
amino-san-hakkô	アミノ酸醗酵	amino acid fermentation